

本を選ぶ



高校図書館版



NO.80 2025年(令和7年)11月20日
<https://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス
〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643



本がひらく、想像と共感の場 「難民のものがたり展」

林 茉以子

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所が企画する「難民のものがたり展」は、本を通して難民の置かれた現実に触れ、故郷を追われた人々への共感や支援の輪を広げていくことを目指した展示企画です。これまでに高校や大学をはじめ、公共図書館、自治体、書店、企業など、全国各地で開催されてきました。

展示では、「難民のものがたり」を中心に、「平和」「多様性」などをテーマとした本を集めるとともに、絵本、小説、写真集、実用書など、幅広いジャンルを含み、子どもから大人まで読める内容を選んでいます。「難民の体験を知る」「子どもたちのまなざし」「社会と難民」「平和と人権」など、多面的な視点から構成しています。また、ブックリストは参加型で制作しており、作家や翻訳家、アーティスト、支援団体など、さまざまな分野の方々がおすすめの一冊を紹介しています。

本は、国境や文化をこえて人々をつなぐことのできる媒体です。誰かの視点から語られる「ものがたり」に触れることで、現実の出来事を追体験するように感じたり、自分のペースで考えたりすることができます。日々の暮らしのなかで自然に手に取れる存在であるからこそ、難民の現実や希望を自分ごととして考える入り口になります。高

校生がこうした本に出会うことは、世界を見つめる新しい視点を育むきっかけにもなるでしょう。

これまで展示を実施してくださった方々のお話を伺うなかで、「図書館は、誰かの世界を広げる場所でありたい」という言葉が心に残っています。本を通して新しい視点や他者の生き方に出会う経験は、読者の心に長く残り、やがて次の行動や選択へとつながっていきます。展示を通じて、そのような出会いが一人でも多くの人に訪れることを願っています。

UNHCR駐日事務所では、企画を実施するための素材を無償でデータ提供しています。タイトルパネルや本の紹介文パネル、引用パネル、ワークシートなどをダウンロードでき、印刷して自由に組み合わせて展示が可能です。展示実施をご希望の方には、ブックリストのQRコードが入ったしおりや、UNHCRのリーフレットもお届けしています。展示の規模や期間も自由です。館内のスペースを活かした展示から、教室の廊下での実施、生徒の感想文を組み合わせた企画まで、各地で多彩な工夫が生まれています。

ページをめくるひとときが、世界と自分をつなぐ橋になる——。そんな読書の場を、あなたの学校の図書館から広げてみませんか。

みなさまの学校や図書館での新たな読書の試みに、この企画が少しでもお役に立てば幸いです。

企画詳細、ブックリスト等は[公式サイト](#)からご覧いただけます。展示を企画いただける場合はUNHCR駐日事務所お問い合わせフォームよりご連絡ください。



（はやし まいこ：UNHCR駐日事務所）

2年目の挑戦

～とりあえずやってみる！～

宮本 和樹

初任地として現在の勤務校に赴任して5年目となりました。勤務する松江農林高校は3つの学科で構成される専門高校です。生徒は実習や学校行事等で忙しく、読書をする余裕はあまりないのであったのが赴任しての第一印象でした。しかし実際に生徒と話してみると、それぞれが様々な分野に興味を持ち、活発に活動していることを知りました。そのような生徒たちとなら多様な取り組みができるかもしれない！と可能性を感じました。その後、病気治療で仕事を休んだため、落ち着いて取り組めるようになったのは2024年。そこから私の挑戦が始まります。生徒と協力して工夫を凝らし、楽しみながら様々な挑戦をしているので、その取り組みを紹介します。

1年目の挑戦 ー書店とのコラボー

図書館に来てくれても本には触れてくれない……。そんな状況に危機感を持っていました。スマホやインターネットでは得られない体験を、読書でしてもらいたい。そんな思いがあります。

幸いなことに本校は地域で最大規模の書店まで徒歩5分の場所に位置しています。常連の生徒がいる一方で、ほとんど足を運んだことがない生徒も多い様子。せっかく近くに素敵な書店があるのだから学校図書館とはまた別の魅力をもった書店も身近に感じてもらい、少しでも紙の本に触れる機会を増やせたらと考えました。

「連携展示してはどうか」と思いつき、企画スタート。書店の方にもご快諾いただいたので、書店によく行く生徒やそうでない生徒も一緒に企画内容を練りました。そして以下の3つに決定。

1. 本校の活動紹介コーナー

2. 生徒のおすすめ本コーナー

3. 間本コーナー（本を紙で包みタイトルや著者が分からない状態で、生徒の紹介文を頼りに購入してもらう、ワクワクを楽しんでもらう仕掛けです）

準備ではイラストが得意な生徒に本の紹介POPを、レイアウトを考えるのが好きな生徒には展

示のセッティングを担当してもらい、生徒の興味関心や強みを踏まえながら取り組みました。展示期間は約2週間です。生徒からは「書店員になった気分で、来てくださるお客さんのことを考えて取り組んでいる自分がいました。良い経験になったし楽しかった」「書店が身近になった」という声を聞くことができました。

この“高校生目線のブックフェア”は書店に訪れたお客様からも面白いと好評だったようです。これをきっかけに書店と学校と地域のみなさん一体となって読書文化を盛り上げていきたいです。



1年目の挑戦 ー校内での取り組みー

それまでも定期的に開催してきた図書館イベントですが「イベントやっていたの？」と後から生徒に言われてしまうことが何度ありました。開催情報が生徒に十分伝わっていないという課題があります。そこで3つの段階目標を設定し活動することにしました。

まず「図書館や本に興味関心を持ってもらうこと」を目指します。活用したのは生徒が毎日使う玄関横の階段。階ごとにテーマを設定し、2階から4階までの踊り場に本を展示しました。特に、テーマに関連する豆知識や行事などを併せて紹介することで展示した本に興味を持ってもらえるよう意識しました。また、階段の蹴込み板に図書館へのルート案内を掲示。周りの景色に埋もれないように毎月動物のイラストを添え、変化をつける工夫をしました。生徒や教職員からの「展示をみたよ」や「来月の展示が楽しみ」という声が届み

になりました。

次に実際「図書館に来館してもらう」ことを目指し、スタンプラリーや宝探しゲームといったイベントを実施しました。普段は図書館に来ない生徒にもたくさん来てもらうことが目標です。ポスター掲示や校内放送はもちろん、生徒専用のウェブサイト上でも案内を行いました。

さいごに「本を借りてもらうこと」を目指し、館内のレイアウトに工夫を加えました。それまでは本の背表紙ばかりが並んでいましたが、目線の高さにある本棚は本の表紙が見えるように並び替えました。読む本を表紙で決める生徒も多いので、自然にたくさんの表紙が目につくようにしました。また、図書館の床にすごろくを設置し、楽しみながら館内を巡るようにしました。これにより普段読まない分野の本棚にも自然と近づくことができます。

1 年目の挑戦の結果は・・・でもめげない！

2024年度の取り組みの結果、朝登校したら真っ先に図書館に来る生徒が増えるなど居場所としての図書館をつくることはできたと感じています。しかし、まさかまさか年間貸出冊数という指標では前年度より大幅に減少してしまいました。理由としては授業での図書館利用減少と図書館を場所として活用する機会が多かったわりに本の貸出をあまり呼びかけなかったからだと思います。貸出に繋がれるよう意識しつつ、引き続き図書委員が楽しく活動できるようサポートし、みんなが集まる図書館を目指して2025年、2年目の挑戦に続きます。

2年目の挑戦

まず、これまでは一年生を対象に行っていた年度当初の図書館オリエンテーションを全学年に広げ、生徒に直接図書館の活用方法やイベントの紹介、所蔵資料を案内。すべての生徒が図書館に来る機会を作りました。

次にコミック資料を活用した取り組みです。本校は「好きな本を読む」をスローガンに毎日朝読書を実施しています。読書への苦手意識をなくすためにそれまで対象外だったコミックや雑誌を解

禁。楽しく読書してもらえるようにしました。それに合わせて図書館で所蔵するコミック資料の積極的な展示をしたことで貸出冊数は増えました。これらの活動の結果、全校生徒のうち、年間貸出冊数が一冊以上の生徒の割合は前年度より増加し、年間貸出冊数の合計値も前年度を上回る見込みです。

9月からは図書館ポイント制度を始めました。来館や貸出などに応じてポイントがもらえ、貯めると景品と交換できる制度です。本を借りなくても来館やイベントへの参加だけでポイントがもらえるのが特徴です。景品には図書委員オリジナルのしおりやブックカバーのほか、編み物が得意な生徒に協力してもらい手作りの造花を設定しました。

また引き続き積極的に、図書館を学習や交流の場として提供しています。高大連携を推進する「おしプロ」という事業で実施されている多様な講座を図書館で受講できるようにしました。一人では受講する勇気がなくても、友達と一緒にであれば受講したいという生徒の声を反映した取り組みです。生徒から希望のあった国際交流イベントも行いました。地域に所在する大学の留学生をお招きし、その方々の出身国にちなんだお菓子を食べながらお互いの国の文化などについて紹介しあい交流を深めました。他にも県や市の国際交流員の方をお招きし、文化講座の開催を予定しています。

図書館活動に携わってくれている生徒の興味や関心を尊重しているため継続している活動とそうでないものもありますし、突発的なイベントを企画することもあります。

私は「とりあえずやってみる」の精神で取り組むことを意識しています。そうして身の回りにあふれる様々なアイデアを図書館の活動と組み合わせしていく、「学校司書による探究活動」を実施しています。貸出冊数を増やすことももちろん大事ですが、それ以上に「図書館があってよかった」、「図書館の活動に携われてよかった」という声を聞きたいと私は思っています。あの司書さんがいるから行きたい、と生徒に思ってもらえるような図書館を創っていきたいです。

(みやもと かずき：島根県立松江農林高等学校司書)

「10代がえらぶ海外文学大賞」で 海外 YA 文学を盛り上げよう！

鳴川 浩子

今年、「10代がえらぶ海外文学大賞」が開催されました。魅力的な作品あふれる海外文学を、10代にもっと読んでもらいたい！ そんな思いだけで生まれた文学大賞。だから、第一次投票は年齢制限なく、誰でも参加できるけれど、最終投票の権利は10代のみ。選考対象は2024年に刊行された選考委員の翻訳本をのぞく10代が主人公の海外文学。10代が自分たち自身で選ぶ自分たちのための文学大賞です。

選考委員は6名。この賞を立ち上げた翻訳家の三辺律子さん。YA 翻訳文学といえば法政大学名誉教授の金原瑞人さん。ダン・ブラウンの作品をはじめミステリー文学の翻訳を手掛ける越前敏弥さん（今回のみ、越前さんの代わりに東京大学名誉教授でフランス文学者の野崎歓さんが選考委員をしてくださいました）。『文化の脱走兵』（講談社）で読売文学賞を受賞し爆進中のロシア文学翻訳家の奈倉有里さん。蔦屋書店で文学コンシェルジュをしていて河出真美賞を立ち上げた河出真美さん。そして裏方のお手伝いのつもりでいたのに気づいたらちゃっかり選考委員になってしまった私立中高で専門・専任・正規で司書教諭をしている私。他にも運営を担うスタッフとして実行スタッフが数名。10代が主役なので、学校図書館や公共図書館の支援や協力が肝。東京学芸大学附属世田谷中学校司書の村上恭子さんや元埼玉県立高校司書の本下通子さんに加え、書店員や編集者がスタッフとして支えています。

10代に限らない、誰でも参加できる第一次投票で選ばれた（15冊の予定が、同票作品があったので）16冊に選考委員推薦の6冊を加えた22冊を、選考委員それぞれで読むこと1か月ちょっと。6月末に選考会が開かれました。喧々諤々、^{けんけんがくがく}激しい論争を繰り広げ……ることなく、本好きが共通に読んできた面白い本の話で盛り上がる、とてもとても楽しい時間でした。もちろん、真面目に本の内容について話し合って選考をしたのです

が、大賞を選ぶのは10代なので、直木賞や芥川賞の選考会のようにはなかったのです。

そして7月にノミネート作品7作を発表し、夏休みが明けた9月に10代による最終投票がおこなわれました。皆さんの学校の生徒さん、投票してくださったのでしょうか？ そもそも、この大賞をご存知でしたでしょうか。実は、応援図書館の登録も募っていますが、学校図書館からの登録が思っていたより少ないのです。本誌「本を選ぶ 高校図書館版」を読んでくださった学校図書館の方は、ぜひHPから応援図書館への登録をお願いします。登録の公開・非公開が選べます。非公開で登録すれば、そのことはスタッフの心にうちに喜びと共にとどめられます。そして学校図書館の片隅（いえ、できれば大々的）にコーナーを作って海外YA文学を応援していただければと思います。登録するとメルマガが届き、いち早くノミネート作品や受賞結果を知ることができ、余裕をもってコーナーづくりの準備ができます。本屋大賞の発表と同時に書店で本屋大賞の特設コーナーが組まれるのと同じ仕組みです。あらかじめ、受賞結果を知っていて、出版社も書店も準備している、というあれです。ぜひ、登録して一緒に海外YA文学を盛り上げてください。

第1回大賞作品は『ソリアを森へ』

10代による投票を経て栄えある第1回「10代がえらぶ海外文学大賞」を射止めたのは『[ソリアを森へ](#)』（[チャン・グエン 作/ジート・ズーン 絵/杉田七重 訳/鈴木出版/2024](#)）。

そして大賞作品に猛追した『[闇に願いを](#)』（[クリスティーナ・スートンヴァット 作/こだまともこ・辻村万実 訳/静山社/2024](#)）が特別賞を受賞しました。

11月12日には22作品の翻訳家と選考委員、そして投票してくれた10代を招いての発表会も神保町にある出版クラブで開催されました。なんと関西から日帰りで駆けつけてくれた10代もいまし

た。発表以降、文学大賞をきっかけに海外YA文学を盛り上げるイベントも開催しています。みなさんの学校でもぜひコーナーを作って、海外YA文学を読むきっかけにさせていただきたいです。この文学大賞は、文学大賞を開催することによって海外YA文学全体を盛り上げたい、という思いがあります。私自身は日本文学、海外文学、関係なく、面白そうな内容で読んでいます。でも2015年に金原瑞人さんが三辺律子さんとイラストレーターのオザワミカさんで発行を始めた『BOOK MARK』という海外文学を紹介するフリー小冊子を取り寄せて、紹介された本を読んだり、イベントに参加したりしているうちに、海外文学があまり読まれていないということに気が付きました。

皆さんの学校では海外文学はどれぐらい読まれているのでしょうか。海外文学を意識した取り組みを始めてから、知り合いの司書に海外文学はあまり読めていない、と言われることが度々あります。世界中に溢れる難民の人たちや関わる人たちの状況や感情がぐいぐい迫ってくるヴァースノベル『僕たちは星屑でできている』。イタリアにドイツ語を話す地方があることを知った『この村にとどまる』。LGBTQの苦悩と理想を描いた『理想の彼女だったなら』。戦争で犠牲になるのはいつだって弱い立場の人たちであることを突きつける『アドニスの声が聞こえる』。ノミネート作品には残らなかったけれど一次選考を通過した作品の一部です。

数年前から「〇〇ファースト」という言葉が流行っています。そこに人々を分断するような出来事が重なり、内向き志向に拍車がかかっているように感じています。国内の作家にも海外を舞台にした魅力的な作品を書く作家はたくさんいます。でも、やはりその国で生きて生活をしている作者が、その国に生きる若者に向けて書いた物語だからこそその魅力とメッセージがあります。それが翻訳されて、日本の若者に届き、国境や時間を超えて、同世代の生活や文化を知り、自分たちと同じであることを知る。物語を通じて世界と繋がりが広がってほしい。私が海外文学を10代にもっと読んでほしい、と思っているのはそんな願いからです。

第2回「10代がえらぶ海外文学大賞」に向けて

「10代がえらぶ海外文学大賞」は第2回も開催します。第1回の反省を活かしてノミネート作品の発表を早める予定で準備を進めています。そして10代の参加者をもっともっと増やしたい。そのためには、選考委員やスタッフの力だけでは限界があります。全国各地の学校図書館の応援が必要です。本誌「本を選ぶ 高校図書館版」を読んでいる方の学校図書館の生徒が一人でも投票してくれば、すごい投票数になります。ぜひぜひ、皆さんのご協力をお願いします。そして一緒に海外YA文学を盛り上げてください！

(なるかわ ひろこ:玉川聖学院司書)



DMかたろぐ

広い世界の芸術にふれる全3冊！

美術にふれる絵本セット

ハリエット・ヴァン・レーク / ワウター・ヴァン・レーク 作
野坂悦子 / 訳 ●A4変 / 平均26頁 / 定価：本体4,400円＋税



モンドリアン / ヒルマ・アフ・クリント / エゴン・シーレ

朔北社

〒191-0041 東京都日野市南平 5-28-1-1F
TEL042-506-5350 <http://www.sakuhokusha.co.jp>

大学的地域ガイド

地元大学の先生が“こだわりの歩き方”を直伝。
現在 39 巻刊行。ぜひお揃えください！

定価 各2200円～2750円（税込）



大学の多摩ガイド

塚田修一・松田美佐 編

大学の岩手ガイド

岩手県立大学総合政策学部 編

大学の長野ガイド

長野大学環境ツーリズム学部 監

大学の埼玉ガイド

ものづくり大学教養教育センター／井坂康志 編

図書出版 昭和堂

京都市山科区日ノ岡堤谷町 3-1
〒607-8494 TEL 075-502-7500

